

やるしかない！ ゼロから始める学年経営

怒鳴らずに済む指導を考える

島本政志

1. 2週目が終わっての現状

「はじめは丁寧な言葉づかいでやっていただけ、話を聞かないから何度も言わないといけないから疲れる。」

「立ちましようって言っても、さっと立たないから、すぐに授業をはじめられないです。」と同僚の先生が学年会で言っていた。

私自身もこのクラスの給食準備のこともたじた感じにいらつき、連絡帳を書いたと言っていた子が書いていなかったことが分かり、きつい口調で「書いてへんやないか！」と大きな声で叱ってしまった。

自分は子どもの動きに関してはいらしやすいところがある人間だと思

勤務校は特に学習規律ということが重視されている。もちろんそれはとても大切なことなのだが、きちっとさせることが非常に求められる学校である。そういったこともあり、自分も少し過敏になっているかもしれない。

2. 怒鳴り声は崩壊への第一歩

ただし、体験的にも言えることだが、この怒鳴る回数が増えると良くない。

子どもは怒鳴り声にも慣れていくからである。つまり、怒鳴るということを通常の指導の手段としては選択肢に入れてはいけないのである。このことは、学年の先生にも何度となく伝えている。

かつて同僚が怒鳴りまくって子ども

を動かしていたが、2学期に入り、反発され収集がつかなくなり、病休に入ってしまったことがあった。

最初はやんちゃな子どもおとなしくする。しかし、やがて反発する。中間層とよばれる子どもたちは反発まではしないかもしれないが、担任からこころが離れてしまい、学級をささえるメンバーにはならないのである。

つまり、一度怒鳴って子どもを統制するようなことが始まると、子どもは怒鳴られないと動かなくなっていくのである。結果的に怒鳴る回数が増える。怒り方も激しくするしか無くなっていく。何も生産的ではない。悪循環のはじまりである。苦しい日々のはじまりである。

3. 自分がいらだちを分析する。

①怒ってしまったできごと

二年生の国語「ふきのとう」で話し合う場所が2、3場面なのに1場面について話し合っていた班がいた。

② そのときどう感じたのか

授業中の課題が分かかっていない子がいて、授業時間がのびてしまった。授業の終わりになつてから、「1場面を分けました。」と言っていた。何を聞いていたんだと思った。

③ 実際はどうしてほしかったのか

どこの場面を話し合うのかを分かかってほしかった。

班の中でちゃんと話し合っていない子もいた。まじめにやってほしかった。

④ 何をしたらいいのか。

どこの場面を話し合うのかをもっとはっきりと示す。黒板を使う。言わせる。

机間巡視の中で話し合いができてくるか「確認」をする。

何をやった方がいいのかはつきりしないから空白が生まれて、遊んでしまう子がでてしまったのだと思う。

こうやってみると、対策できることが分かった。

子どもの動きのまずさはこちらの指

導不足、もっと言えば指導するための準備不足だ。

次のようにしたい。

① いきなり班で話し合うのではなく、お隣の人に自分の工夫した音読を聴いてもらう。

② それができてるから、班の形にする。

③ どんな工夫を4人にするのかについて話す発表者を決める。

④ 机間巡視を早い段階で、特に気になる子のいる班のところに行き、どのように取り組んでいるかを確認する。

⑤ 授業を5分前には終えるようにする。

まだほかにも方法はあると思う。

後から考えて、あの場面は叱って良かった。もっと言えば怒りを伝えてよかったという場面は確かにある。高学年女子にもある。

しかし、これは叱る、怒ることが必要な、人権侵害、身勝手な自己中心的なふるまいが続いたときなどに対してである。

2年生の子が連絡帳を書いていなかった

たことぐらいで声を荒げる必要はなかった。その子は本当に書いたと思ひ込んでいた可能性もある。

4. 子どもとの信頼のために

小さなことを叱っていると本当に大切なことで叱ることができなくなっていく。

子どもは、それまでのくだらないことへの叱りとの区別がつかないのである。

つまり、本当に叱っても伝えたいメッセージが届かずに終わってしまうのである。

人と人とのコミュニケーションにおいては信頼がもっとも大切である。

些細なことで怒っていると、子どもは心を開かなくなってしまう。

そのことは結果的に、その担任としての影響力、指導力をほとんど無くしてしまうことになる。

参考文献

『マンガでよくわかる 子どもが変わる 怒らない子育て (嶋津良智)』

『子供を動かす法則(向山洋一)』